



ソサイエティ制雑感

総務理事 池上徹彦

私はソサイエティ制を本格実施中である。種をあかせば、私は1994年のIEEEのLEOS (Laser and Electro-Optics Society) の会長 (President) である。

ソサイエティの最高決定機関は年3回開催されるBoG (理事会) で、大よそ50名が出席し、3年任期の12名からなる選出理事と、会長、選出会長 (President-elect)、セクレタリ、副会長、それに退任会長等が投票権をもち議事を決する。議事は米議会で採用されているロバートの法則に従って進められ、会長はIEEE本部で、まず米流代表民主主義プロトコルをたたきこまれる。国内では会長経験者の東大生研の原島文雄所長が私の先生である。

約7,000人の会員をもつLEOSでは、4年前から副会長制を導入し、ソサイエティの運営の効率化をはかってきた。会計、会議 (研究会)、技術、編集/出版、会員サービス、国際の6人の会長指名の副会長が、それぞれの担務を他副会長と連絡をとりながら効率的に進めている。

役員は、もちろん無給で、使命感をもってとにかく良く働く。学問的にも一流の研究者で、招待講演をこなしながら理事会、学会運営会議をかけまわる。議論の後は必ずアクションプランを作り、一歩前進する。米国社会が、学会に属していること、更に役員に就任することを高く評価していることも、彼らにインセンティブを与えているのだろう。他方、役員になっていてもひとたび「能力に欠ける」と判断されるとこの社会では絶対に浮かばれない。しかし、そうなら別社会へ行ったりやり直しがきくのも米国である。

理事会での話題は意外と思われるかもしれぬが「金、金、金」である。世界のトップジャーナルの一つである論文誌は経済的理由で遂に来年から2分冊とすることを5月の理事会で決定した。経済的自立を前提としているので、名誉のために赤字出版するということは認められない。その背景には、既に世界レベルでの「名誉」は確保しているという自信がある。会計VPは“bottom-line keeper/boy”とよばれ、経理インパクトをおうむ返しのように問うてくる。

LEOSの現課題の一つは、企業に属している会員のためのプログラムをどうつくっていくか (米企業の競争力強化!) にあり、7名の女性スタッフを統括する新任の事務局長に、かつてはベル研に在籍し、AT & Tの製造部門のVPも経験したエル・ラプダ博士を50人強の応募者の中から選定した。これは米国でもユニークな発想で、最終的にはスタッフが私の方針に賛成してくれたからと推察している。

LEOSの活動で素晴らしいところは、日本からは顔のみにえない米国を本当に支えている人々と付き合えることである。もし私に「日本の差は？」と問われたとすると、「違いはありませんよ」と「とてとても…」の異なる答えをしよう。前者は、ひとつの共通の目的のため共に悪戦苦闘した場面を思っているときであり、後者は「外人」に会長をやらせる米国のすごさを思うときである。

電子情報通信学会のソサイエティ移行作業も順調にスタートした。会員サービスを第一義とし、担当者が一人称で努力するか否かに、その結果はかかっている。共に新しい歴史を作っていきましょう。